

吉備国際大学研究紀要

(人文・社会科学系)

第29号, 109-124, 2019

アウトリーチ型地域子育て支援活動への参加学生の学び —未就園児親子への「出前講座（親子ふれあい遊び）」の実践から—

藤井 伊津子*・高田 康史**・秀 真一郎*・
雲津 英子*・近江 望*・栗田 喜勝*

The Influence of District Child Rearing Parents Supports with Outreach System to the Relationship between Parents and children —Based on the Students initiative practices of the mutual touching play between parent and child—

Itsuko FUJII・Yasuhumi TAKATA・Shinichiro HIDE・
Eiko KUMODU・Nozomu OHOMI Yoshikatsu KURITA

Abstract

The aim of this paper is to get the fundamental materials about the enrichment of child rearing parents support with outreach system. It is based on what the students who participate in the child rearing parents support with outreach system realize for their results and issues.

In child rearing parents supports with outreach system, it can be said that students experience the effective child rearing parents support through the connecting with parents and the preparation for support. As the characteristic of child rearing parents support with outreach system, it necessarily happens that child and parent participants connect each other even though they meet first time because of the discontinuous activity. It is very important for students to be aware of the positive relation with children and parents in successful experiences. It can't be thought the students results and issues without effective cooperation between the real experience and the regular curriculum.

Key words : Child Rearing Parents Supports, Teacher Training in Early Childhood Education and Childcare, Outreach System, District Coordination

キーワード : 子育て支援, 保育者養成, アウトリーチ型, 地域連携

* 吉備国際大学心理学部子ども発達教育科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8
*Department of Child Development and Education Kibi International University
8, Iga-machi, Takahashi, Okayama, Japan (716-8508)*

** 広島文化学園大学健康福祉学部スポーツ健康福祉学科
〒731-4312 広島県安芸郡坂町平成ヶ浜3丁目3-20
*Department of Sports, Health and Well-being Faculty of Human Health Science Hiroshima Bunka Gakuen University
20,3,3, Heiseigahama, Saka, Akigun, Hiroshima, Japan (731-4312)*

I. 研究の背景と目的

近年の子育て環境の変化に伴い社会全体で子育て家庭を支援していくことが強く求められる時代となった¹⁾。

大豆生田は、保育の場の子育て支援の課題として、「子育てに困難をかかえる家庭への支援体制」と「地域の子育て家庭への支援」の二つをあげている。そして、地域の子育て支援は、親子の交流や居場所としての機能と、ゆるやかな交流を通した支援やソーシャルワーク的な専門性が求められること、保育の専門性の延長線上に地域支援の専門性を位置づけていくことも大切であると述べている²⁾。

新「保育所保育指針」においては、従来の「第6章 保護者に対する支援」が「第4章 子育て支援」に変更された³⁾。このことについて、『保育所保育指針解説』には「保育所を利用している保護者に対する子育て支援については、保護者の子育てを自ら実践する力の向上に寄与する取り組みとして、保育の活動に対する保護者の積極的な参加について記載するとともに、外国籍家庭など特別なニーズを有する家庭への個別的な支援に関する事項を新たに示した。地域の保護者等に対する子育て支援についても、…（筆者省略）…関係機関との連携や協働、要保護児童への対応等とともに、保育所保育の専門性を生かすことや一時預かり事業などにおける日常の保育との関連への配慮など、保育所がその環境や特性を生かして地域に開かれた子育て支援を行うことをより明示的に記載した⁴⁾」とある。

また、新『幼稚園教育要領解説』においても、子育て支援について「近年、都市化、核家族化、少子化、情報化などの社会状況が変化する中で、子供にどのように関わっていけばよいのか悩んだり、孤立感を募らせる保護者の増加などといった様々な状況が指摘されている。保護者の子育てに対する不安やストレスを解消し、その喜びや生きがいを取り戻し

て、子供のよりよい育ちを実現する方向となるよう子育ての支援を行うことが大切である。

幼稚園は幼児の家庭や地域での生活を含めた生活全体を豊かにし、健やかな成長を確保していくため、地域の実態や保護者及び地域の人々の要請などを踏まえ、地域における幼児期の教育センターとしての施設や機能を開放し、子育て支援に努めていく必要がある⁵⁾」と述べている。

新「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」においても子どもの利益を最優先として、地域の関係機関との積極的な連携と協働により子育て支援を推進し、地域における乳幼児期の教育及び保育の中心的な役割を果たすよう述べている⁶⁾。

これら3法の改訂、改定および2016年度から実施された「子ども・子育て支援新制度」の流れの中で、保育者養成課程においても「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の一部改正が行われ、2019年4月から施行されることになった。その改正にあたり、「保育の本質・目的に関する科目」の必修に「子ども家庭支援論(講義2単位)」「保育の内容・方法に関する科目」に「子育て支援(演習1単位)」が取り入れられた。このことから保育者養成において、地域の子育て家庭を対象とした支援力の育成は一層重要な課題となったことがうかがわれる。

これまでの保育者養成校が取り組む子育て支援活動に関する研究について以下に概観する。

竹之下・馬見塚(2016)塚本(2013)から、子育て支援活動は正規の保育実習では体験しがたい乳幼児理解の場や保護者との交流の機会になっていることが分かる⁷⁾⁸⁾。これについて、橘・小原(2014)は、「子育て支援力は、学生と保護者の二者の関係だけでなく、子どもを含めた三者の関係の中で経験を通してこそ養成される」と述べている⁹⁾。また、福井・小栗・瀧川(2008)らは、「実践において『学生主導』に方向づけるような仕組みが必要である¹⁰⁾」と述べ、大高(2016)は学生自ら活動内容を考え実践したこ

とで活動意欲を高めていると報告している¹¹⁾。これらのことより、子育て支援活動は、教師主導ではなく学生主導で活動を企画・展開していくべきであると示唆される。また、竹之下・馬見塚(2011)らは、「座学と実習体験の両輪の学習スタイル」が学びを促進する条件であると述べており、日常の講義と子育て支援活動実践の往還の重要性を示唆している¹²⁾。以上のように、子育て支援活動は、学生にとって保育実習では得られない乳児理解や保護者理解の場であり、学生の学びの効果をより一層高めるには主体的な取り組みであることや講義と関連づけさせることが重要であるということがこれまでの研究成果から明らかとなった。

しかし、子育て支援活動の課題として参加率の問題も生じている。上述した橘・小原(2014)調査によると、子育て支援活動に参加する学生は、全体の4割程度であることを報告し、子育て支援活動に参加する学生が少ない＝子育て支援力が養成されにくい現状に警鐘を鳴らしている¹³⁾。一方で石塚・並木・杉本(2009)では、学生に授業の一環として親子サロンに参加することを全員に義務づけた取り組みを行っているが、「授業での全員参加という意識が学生にあり、主体的な関わりが少なく、やらされているという様子もうかがえた¹⁴⁾」と述べ、機会を強制的にもたせることの功罪を報告している。以上のことから、子育て支援活動は主体的な活動でこそ学生の体験・学びが深まるものの、現状では学生にとってその機会は十分であるとは言えず、各養成校の特色を生かした子育て支援活動の充実や在り方の再考が必要であると考えられる。

筆者らは、大学の地域貢献と質の高い保育者の養成を目的に2013年12月から地域の未就園児親子を対象にしたアウトリーチ型子育て支援活動「出前講座(親子ふれあい遊び)」を実施してきた。アウトリーチ型とは、従来の活動のように大学内や市内の中心地で活動を開催する形ではなく、各地域の公民館な

どに各箇所年1回出向いて活動を行う形の実践形態である。筆者らがアウトリーチ型の実践を行うようになったのは、中山間地域に位置する本学周辺在住の未就学園児親子が子育て支援センターを日常的に利用したいという要望はあるものの、地理的な問題から日常的には参加できない状況であったためである。これまでに、本学のアウトリーチ型子育て支援活動に関する、母親及び参加親子への影響については明らかにしてきた¹⁵⁾が、学生育成の成果と課題については未だに明らかにできていない。そこで本研究ではアウトリーチ型子育て支援活動に参加した学生が何を成果・課題と捉えているかを明らかにすることでアウトリーチ型子育て支援活動充実の基礎資料を得ることを目的としている。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査概要

(1) 調査期間

2016年4月～2018年3月

(2) 調査方法

2016年及び2017年度に実施した出前講座について出前講座終了後に毎回学生に行った振り返りシート内容を分析する。

①振り返りシート内容

ア：学年と氏名、イ：それぞれの参加学生が行ったこと、ウ：参加して良かったこと、エ：反省と課題について、の自由記述である。

本稿では、ウ：参加して良かったこと、エ：反省と課題、に記述された内容を分析し考察する(記述内容については巻末資料に全文を掲載)。

②対象

2016～2017年度出前講座に参加した学生延べ70人。

③分析方法

本研究は、テキストマイニングソフトKh coder

を使用して分析を行った。自由記述について、抽出語リスト及び共起ネットワークを作成した。抽出語リストは、名詞、サ変名詞、形容動詞、副詞（+副詞可能）、動詞、形容詞について記述数の多い順に表記した。また、共起ネットワークは、最小出現数2、及び描写数60で設定し、強い共起関係ほど太線で、出現頻度が高いほど大きい円で描写されるように設定した。本研究では、この抽出語リスト及び共起ネットワークを用い、記述量と共起ネットワークでの共起関係のある語句をもとに、学生の自由記述（原文）と比較した。

2. 出前講座（親子ふれあい遊び）概要

(1) 実施場所

高梁市子育て支援センターの遠隔地にある市内地域局等年間6カ所。

高梁市は岡山県の中西部に位置する中山間地域であり面積550km²弱、人口約32,000人（2015年国勢調査）、世帯数13,500弱の高齢少子化地域である。1年間の出生数は190人前後（T市からの情報提供：2017/9/13）であり、そのほとんどが市の中心地域に在住しており、周辺地域は幼稚園・小・中学校の統廃合が進められている状況にある。市の大学に対する協力連携は強く出前講座の開催にあたっては、場所の決定や広報活動の協力をはじめ、毎回の出前講座開催には、市担当部局から1名の同伴があり運営にあたって大きな力となっている。

(2) 活動内容

①親子と学生のふれあい遊び

学生主体で活動内容を企画し運営した。内容は絵本の読み聞かせや紙芝居、わらべうた、手遊び、折り紙、木製玩具や人形・ボール等での遊び等であった。

子育て支援活動の活動時間のうち、前半約30分をわらべうた、絵本、紙芝居、ふれあい遊びなど、学生から親子に対して提供する遊びと、残りの後半には、木のおもちゃなどの玩具や学生が製作した児童文化財を用いた自由遊び、交流を行った。

②教員による学生への支援

教員による学生への支援として、親への関わりや親同士をつなぐ声かけ、遊びへの誘いかけ、乳幼児親子と学生の関わりについての援助等を行った。また、自由遊びの時間は個々の親子のペースに寄り添いつつも、子どもと学生、親同士、親と学生、親と教員とのふれあいの時間となるよう働きかけた。

(3) 開催日時と参加人数

時間：毎回10：00～11：30

参加学生数：70人（2016年度：29人、
（延べ数） 2017年度：41人）

開催期日及び参加者数の内訳は表1、表2の通りである。

Ⅲ. 結果及び考察

表1 2016年度 出前講座（親子ふれあい遊び）開催期日及び参加人数

回	開催期日	保護者	子(年齢別参加人数)	学生
第1回	6月16日	4人	4人(1歳児:1人,2歳児:2人,3歳児:1人)	2名(4年生)
第2回	8月4日	19人	27人(0歳児:2人,1歳児:6人,2歳児:12人,3歳児:1人,4歳児:2人,5歳児:3人,7歳児:1人)	8人(2年生:3人,3年生:3人,4年生:2人)
第3回	9月27日	16人	18人(0歳児:4人,1歳児:7人,2歳児:4人,3歳児:3人)	8人(2年生:3人,3年生:1人,4年生:4人)
第4回	10月13日	4人	4人(0歳児:1人,1歳児:1人,2歳児:2人)	5人(4年生)
第5回	12月1日	5人	6人(0歳児:1人,1歳児:4人,2歳児:1人)	3人(4年生)
第6回	1月13日	8人	7人(0歳児:1人,1歳児:2人,2歳児:4人)	3人(4年生)
		計56人	計66人	計29人

表2 2017年度 出前講座（親子ふれあい遊び）開催期日及び参加人数

回	開催期日	保護者	子(年齢別参加人数)	学生
第1回	6月9日	11人	12名(0歳児:7人,1歳児:4人,2歳児:1人)	10人(4年生)
第2回	8月3日	13人	14人(0歳児:1人,1歳児:3人,2歳児:5人,3歳児:4人,4歳児:1人)	10人(4年生)
第3回	9月28日	13人	15人(0歳児:1人,1歳児:4人,2歳児:9人,3歳児:1人)	9人(3年生:6人,4年生3人)
第4回	10月13日	6人	8人(0歳児:3人,1歳児:4人,2歳児:1人)	4人(4年生)
第5回	12月14日	7人	9人(0歳児:2人,1歳児:4人,2歳児:2人,3歳児:1人)	5人(4年生)
第6回	1月11日	10人	11人(0歳児:1人,1歳児:2人,2歳児:2人,3歳児:6人)	3人(4年生)
		計60人	計69人	計41人

表3 「参加して良かったところ」抽出語リスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	53	楽しむ	4
思う	29	交流	4
楽しい	20	今日	4
見る	20	参考	4
良い	15	子	4
保護者	14	紙芝居	4
関わる	11	自分	4
嬉しい	10	手遊び	4
年齢	9	初めて	4
遊ぶ	9	少し	4
一緒	8	笑顔	4
活動	8	親	4
関わり	8	親子	4
歌	7	乳児	4
反応	7	本当に	4
シアター	6	練習	4
学生	6	アイデア	3
経験	6	喜ぶ	3
参加	6	今	3
前	6	今回	3
読む	6	使う	3
方々	6	自信	3
パネル	5	写真	3
時間	5	集中	3
実際	5	先生	3
人数	5	同士	3
声	5	入れる	3
様々	5	雰囲気	3
話	5	勉強	3
たくさん	4	遊び	3
歌う	4	様子	3
絵本	4		

表4 「反省と課題について」抽出語リスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	45	対応	4
子ども	42	大切	4
良い	15	沢山	4
練習	13	段階	4
歌う	12	年齢	4
歌	11	伴奏	4
もう少し	9	不足	4
絵本	9	遊ぶ	4
学生	8	コミュニケーション	3
活動	8	パネル	3
関わる	8	歌える	3
自分	8	確認	3
保護者	8	感じる	3
ピアノ	7	距離	3
今回	7	狭い	3
紙芝居	7	見える	3
全体	7	言葉	3
分かる	7	行う	3
シアター	6	使う	3
次	6	失敗	3
声	6	取り入れる	3
遊び	6	手遊び	3
見る	5	小さい	3
広い	5	少し	3
子	5	紹介	3
場所	5	人	3
前	5	全員	3
読む	5	多い	3
難しい	5	打ち合わせ	3
わらべ	4	注意	3
マット	4	低い	3
楽しむ	4	把握	3
緊張	4	必要	3
参加	4	部分	3
準備	4	話	3

学生の自由記述のうち「参加して良かったこと」の抽出後リストを表3に、「反省と課題について」の抽出語リストを表4に示した。また、それぞれの共起ネットワーク図については、図1及び図2の通りである。

1. 参加して良かったことについて

表3の抽出語リストにおいて「子ども」がもっとも抽出数の高い言葉であり図1より、「する-できる-子ども」が共起されていた。また原文には、「実

際に子どもと関わり、反応を見ることができたこと。」「親と子どもの関係を見ることができた。」「なかなか関わるができない0歳児とふれあうことができた。」など、竹之下・馬見塚(2016)塚本(2013)らの先行研究において示唆された乳児理解が深まった様子¹⁶⁾がみられたとともに、橋・小原(2014)の先行研究で指摘された子ども-親-学生の「三者の関係」¹⁷⁾が生じていた様子も見て取れる。このように、アウトリーチ型の子育て支援活動においても先行実践と同等の成果がみられた。また、「する」に関わる原文については、「子どもたちの前で話をしたり、遊んだりするというを実際に体験できて、良い経験になり、自信へとつながった。」とあり、学生が保育技術を高められる場であったと推察される記述があった。福井・小栗・瀧川(2008)は、「子育て支援力」を「基礎的な資質・姿勢・態度」「基盤となる『保育力』」「『保育力』を基盤に『子育て支援を実践する力』」の3つであると定義しており、3者は互いに相乗的な力であるとしている¹⁸⁾。本研究の結果からも子育て支援活動の実践において学生の子育て支援力は向上していくと考えられる。

また、子育て支援活動には不可欠な保護者との関わりという視点で「保護者」のキーワードに目を向けると、図1において、「保護者-方々-すごい-交流-笑顔」などの言葉が共起されていた。原文には「保護者の方々と交流できた点はすごく良かったです。」「保護者の方とも積極的に関わることで、保護者の方からも声をかけてくださったことが嬉しかったです。」との記述があった。前述した通り、保護者-子どもと学生の三者の関係が、学生の子育て支援力を向上させるとすれば、本研究での実践も学生の子育て支援力の育成につながっていると考えられる。また、実践の中では、自由遊びの時間の中で保護者と学生のふれあいの時間となるよう、大学教員が折をみて学生に促している。このことで学生が保護者と関わりやすい状況を作った可能性も

ある。いずれにせよ、子育て支援活動においてその主体は学生であることが学びを深める上で大原則ではあるが、大学教員の関わりとして保護者と学生をつなぐ促しというものがあると考えられる。保育実習では体験できない子育て支援活動の経験をより豊かにするためにも、大学教員には学生と親子のつなぎ方を意識した運営が求められるといえる。

続いて、「様々」に着目すると表3抽出語リストでは5つであり、図1では「様々-年齢-関わり」と共起されている。原文をみると「子どもたちも様々な年齢、性格の子がいたので、その様子を見る事ができて良かったです。」「今日は年齢の幅が広くて、様々な関わりをすることができました。」などの記述がみられた。保育実習や教育実習においては、通常、単一のクラスや年齢を中心に実習を行うことが多く、大半の園は横割りクラスが一般的である。このことから、子育て支援活動で異年齢の子どもとふれあうことや、異年齢の子どもに対して同じ遊びを行うことは、講義や実習では得難い体験であり、学生は活動を通してこれをよかったことと捉えている。

2. 反省・課題について

表4においても表3と同様に、「子ども」が上位に現れた。共起されていたのは「子ども-する-できる-思う-ない」であり、原文には「子どもたちも始めは警戒して遊ぶことができなかった。」「暗幕の後ろに来る子どもへの対応を工夫するべきだと感じました。」などの記述があった。このことより、初めて会う子どもとの接し方や、子どもの予想外の行動に困惑している様子がうかがえる。アウトリーチ型の子育て支援活動では、子どもや保護者と年間1回の関わりとなるため、学生と子ども、学生と保護者の人間関係ができていない状態であることが想定される。養成課程の保育実習などの実習期間は数週間であり、今回の子育て支援活動と比較すると長

期スパンで子どもと関わっている。初めての子どもへの対応はアウトリーチ型や単発型での取り組みでこそ得られる経験であり、これを通して臨機応変に対応する力が養われていくと考えられる。また裏を返せば、初対面の子どもへの対応がうまくいくことで学生は自信をよりつけていき、ひいては保育力の養成につながるともいえる。

また、前項同様「保護者」のキーワードに目を向けると、共起ネットワークには「保護者－学生－使う－コミュニケーション－距離」などが共起していた。原文には「たくさんの子どもと保護者の方と話して、コミュニケーションを取り、自分のことに吸収することができたら良かった。」「保護者の方と子どもたちとどのように関わるべきか分からず、見守るしかなかったです。」という記述がみられた。前項では保護者との関わりをよかったこと＝成果と捉えている様子がみてとれたが、反省・課題においても保護者との関わりに関する記述がみられた。このことより、学生の中には、保護者との関わりをうまく行えたことで成果を感じられた、一方で、うまく関われなかった学生は学びの好機を逃しているともいえる。学生にとって、普段関わることのない保護者とのやりとりは不安や戸惑いが伴うことは想像に容易いが、保護者との関わりこそ子育て支援活動での学びの一つであることを参加学生には周知する必要がある。そのためには、先行研究でも示唆されていたように、事前の講義とのつながりを意識して保育士養成を行うとともに¹⁰⁾、支援活動前の事前研修や打ち合わせにおいて保護者への対応を簡単にレクチャーするなどの取り組みが有効であると考えられる。

最後に、図2より「練習－不足」「準備－きちんと－全員－打ち合わせ」の文言が共起されていた。特に練習は抽出後リストにおいても上位4位にあげられている。原文にも「ピアノがすごく失敗してしまって、すみませんでした。緊張と練習不足でし

た。」「全員の予定が合わず、打ち合わせが前日になり、歌を歌うところや、学生の出し物をするときにしっかりしていれば、もっと盛り上げることができた。」との文言があった。先行研究において全員参加の強制力をもたせる子育て支援活動では学生の主体性が損なわれやらされ感が高まってしまう可能性がある¹⁴⁾と報告がある。一方で、本実践のように学生に課外活動として企画準備から運営反省まで全て行わせることで学生主体の子育て支援活動になるものの、実際には全員で打ち合わせや準備ができる機会を設けることが難しく一部の学生のみ負担が生じたり集団の中で温度差が生じ、それが学生個々の学びの差となる可能性もある。学生の子育て支援力を高めるには活動への参加が不可欠であるが、活動の参加率を上げるため強制力をもたせるか否かについては上記のようなジレンマが付きまとう。そこで、参加に対して強制力がある活動の場合は、大学教員は学生のモチベーションを引き上げより主体性を持たせるための働きかけが必要となり、主体的な活動においては大学教員のファシリテーション能力・マネジメント能力が不可欠な要因であるといえる。

加えて、学校現場、保育現場を含めた社会の全体における働き方改革が叫ばれる中、学生にも少ない準備や打ち合わせで最大の効果を生むように段取り力やコストパフォーマンス感覚を養わせることも重要であり、現在の社会の状況を考えれば必然の流れといえる。

IV. まとめ

本研究ではアウトリーチ型子育て支援活動に参加した学生が何を成果・課題と捉えているかを明らかにすることでアウトリーチ型子育て支援活動充実の基礎資料を得ることを目的とし研究を行った。

本研究でのアウトリーチ型の子育て支援活動において、学生は子ども及び保護者との関わりやその準

備を通して「子育て支援力」の養成に有効な経験を行っていると考えられる。また、アウトリーチ型子育て支援活動の特徴として、活動が単発であるがゆえ初対面の親子との関わりが必然的に生じることがあり、学生は初対面の親子に接するなかで自身の「保育力」や「子育て支援を実践する力」を身に付けていくものと考えられる。裏を返せば、学生が初対面の保護者とのやりとりや子どもへの積極的な関わりを物怖じせず成功裡に体験できるよう大学教員が事前・事後において意識づけさせるとともに、正課のカリキュラムとの両輪で学生を育成していくべきで

ある。また、初対面の親子との関わりについては、保育士養成校でしばしばみられる、お祭りでのボランティアや大学祭での出し物でも同様である。これらの活動時にも大学教員は学生に上記の働きかけが必要である。

最後に、子育て支援活動を含めた課外活動への主体的な参加は学生にとって大きな学びとなる一方で、働き方改革が叫ばれる今日、学生に効率の良い準備や打ち合わせなどを行う術も学ばせることで効率的な仕事術も養わせていくことが今後の保育士養成において必要不可欠である。

引用・参考

- 1) 柏女霊峰 (2017) これからの子ども・子育て支援を考える. ミネルヴァ書房.
- 2) 大豆生田啓友 (2014) 特集子育て支援のこれからⅡ保育の場における子育て支援 新制度時代の保育現場における子育て支援の展望と課題. 発達vol.35.42.
- 3) 厚生労働省告示第百十七号 (2017) 保育所保育指針.
- 4) 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説. フレーベル館. 9.
- 5) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説. フレーベル館. 139
- 6) 内閣府 文部科学省 厚生労働省 告示第一号 (2017) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領.
- 7) 竹之下典祥・馬見塚珠生 (2016) 学生の地域子育て支援ひろば実習から得られた保育士養成の課題. 盛岡大学紀要33巻. 43-52.
- 8) 塚本久仁佳 (2013) 保育者養成校における子育て支援の取り組み. 日本心理学会第77回大会論文集. 1055.
- 9) 橘知里・小原敏郎 (2014) .保育者の子育て支援力の養成に関する研究 ―養成段階からの学びの連続性に着目して―. 日本家政学会誌. Vol.65 N8. 415-422.
- 10) 福井逸子・小栗正裕・瀧川光治 (2008) 「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究 (1) ―短期大学へのアンケート調査の分析を通して―. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要第1号. 35-150
- 11) 大高恵 (2016) 養成校における子育て支援活動と学生の取り組み―学生が行う「ほうせんひろば」の5年間の取り組みと振り返り―. 全国保育士養成協議会第55回研究発表論文集. 342.
- 12) 竹之下典祥・馬見塚珠生 (2011) 学生の地域子育て支援ひろばへの参加による心理的変化の質的研究―SCAT法導入による実習体験過程の理論的仮説生成の試み―. 京都文教短期大学研究紀要50集. 70-81.
- 13) 前掲9)
- 14) 石塚広美・並木真理子・杉本信 (2009) 子育て支援事業における学生参加の意義―子育てサロンでの「母と子の活動」への支援を通して―. 乳幼児教育学研究第18号. 51-62.
- 15) 藤井伊津子・高田康史・雲津英子・秀真一郎・栗田喜勝 (2018) 地域アウトリーチ型子育て支援活動が親子関係に及ぼす影響―学生主導による親子ふれあい遊びの実践を通じて―. 吉備国際大学研究紀要(人文・社会科学系) 第28号.115-12.
- 16) 前掲7)

17) 前掲9)

18) 前掲10)

巻末資料

「参加して良かったこと」

たくさん子どもたちが集まって下さって、楽しく公演ができたと思いました。はじめは1人ぐらいしか来ないかもしれないと思っていましたが、当日はすごくたくさん集まってくれて嬉しく思いました。

とても楽しく、勉強にもなった1日だと思いました。ありがとうございました。

学生の人数も子ども的人数もちょうど良かったと思う。

幼稚園児に低年齢児がふれあうことができ、幼稚園児がお兄さんお姉さんに見えた。

学生が子どもと遊んでいるとき、親同士で交流ができていた。

木のおもちゃは子どもにも大人にも人気であった。

「森の音楽隊」の歌詞が貼ってあって、歌いやすかった。

絵本を集中して見てくれていた。

いきなりだったけど誕生日の歌の伴奏ができて良かった。

しゃぼん玉のときには、子どもたちが楽しそうで安心しました。

子どもだけでなく、保護者の方々の前でも発表できたのが良い経験になりました。

保護者の方々と交流できた点はすごく良かったです。

ピアノの発表は度胸がつくので、本当に良い経験だと思います。

かき氷やポップコーンをおいしくいただけで満足です。

魚釣りは子どもたちも保護者の方々も喜んでくれていたようで嬉しかった。

夏休み中だったけど、小さい子どもとふれあえて良かった。

交流のとき一緒にやっていた子どもが来ていて、大きくなっていた。

子どもとたくさんふれあうことができた。

大勢の子どもたちとふれあうのが久々だったので、一緒に活動することができ、楽しかったです。子どもたちも様々な年齢、性格の子がいたので、その様子を見る事ができて良かったです。

異年齢と様々な子どもたちと接することができて、実習での経験をさっそく生かすことができた。

自由時間のときには、打ち解けることができ、みんなで遊べた。すごく楽しい時間だった。

「あなたのおなまえは」をして、人形を用いたことで子どもの集中を得ることができていたと思う。

色々な子どもとふれあうことができたこと。

少人数だったため近い距離でしっかりふれあうことができたこと。

参加して下さった方々が少なくてびっくりしたけれど、その分皆さんと交流することができたのですごく良い経験になりました。

子どもたちの笑顔ですごく元気をもらえました。

人前で実際にやってみることは本当に力になるし大切なことだと思った。

積極的に関わりについてみる事がすごく大切で、笑顔をもらったときはすごく嬉しかった。

パネルシアターの「写真写真ほーい」では、キリンにとっても興味津々だった。

ペープサートの「ふわふわふうせん」では、最後には一緒にできて良かった。

いきなり歌い始めるより、「○○色の風船は何に変わるのかな～」など声かけをすれば良かった。

子どもが伸び伸びと遊ぶことができていたと思う。少人数でしかできないことができたと思う。

時間がゆっくり過ぎた感じ。

子どもとふれあえたこと。

久々に子どもとふれあえて良かった。

子どもの年齢も様々で、関わっていて楽しかったです。

子どもの人数が少なかったけど、パネルシアターや紙芝居を見てくれて嬉しかった。

「へんてこりんな写真」では、子どもが前に来ていたけれど、楽しんでくれて良かった。

様々な子どもたちと活動を通してふれあえたこと。

保護者の方とも話ができたこと。

一緒に遊んでいた子どもが話しかけてくれたり、遊んでいる遊具をくれたりしたこと。

全員で協力して活動できたこと。

しかし、思っていたよりも子どもたちが楽しそうに活動に参加してくれていたのが嬉しかったです。途中で玩具の取り合いがあったので、けんかや怪我につながらないように注意していましたが、言葉で納得するのが難しい年齢なので、最初は少し戸惑いました。けれど、全体的にとっても良い活動になったと思います。

関わっていくにつれて少しずつ笑顔が増えていって楽しいと思いました。

ボールを用意してくださっていたので良かったです。

歌を歌うときにテンポを少しゆっくりにしたので、みんな楽しそうでした。鈴とのコラボレーションは雰囲気作りに本当に良かったと思う。

絵本を読むときにゆっくと落ち着いて、小さな子どもたちに合わせて読むことができたと思う。子どもたちの笑顔と保護者の方々のすごく絵本を見てくださっていたのが嬉しかったです。仕掛けがあったので、子どもたちも喜んでいたように思いました。文章もほどほどだったので、量も長さもちょうど良かったと思います。

サンタの帽子をかぶっていたので、子どもたちがすごく喜んでくれました。

間で「〇〇だね」などと言葉を発したりしたときにも、子どもたちの反応があったのが嬉しかったです。

「上がり目下がり目」「1本橋」「お弁当箱」の手遊びをした。順番も適正だったと思う。次の動作につなげやすかった。すべて2回ずつ行ったけれど、それも良かったのではないかと思った。鈴に興味をもつ子がいて、使った後に子どもから見えないところに置いておけば良かった。

パネルシアターのときに歌の練習をしていなかったで、各自で練習しておけば間違えなく歌えたと思う。

お母さん方が結構反応してくれたので進めやすかったし、子どもも反応してくれていたで、その反応を拾いながら3人ともできたのではないかと思う。

楽しく進めることができて良かった。

子どもの自己紹介のときは、歌だけではなく今日のように人形を用いるのは良かった。

絵本や歌など思っていたよりも良い反応をしてくれたので、楽しくすることができた。

だけど子どもたちの様子を見ながら演奏しました。ちょうど雪がちらついていてとてもマッチしていたので、この曲を弾いて良かったなと思いました。

大型紙芝居「こねこのしろちゃん」をした。前日練習して文章のところは区切れを入れていたのでとても読みやすかった。歌を入れるところがあったのはとても緊張したけれど、私も楽しく読むことができた。子どもたちの反応も嬉しそうでした。読む前に手遊びをしてくれて助かりました。

今日は始まる前に十分な自由遊びをする時間があって、子どもたちととても関わりやすくて、自分たちの活動もやりやすかった。また、保護者の方とも積極的に関わることができ、保護者の方からも声をかけてくださったことが嬉しかったです。4年生になってからはF先生と一緒にたくさんのボランティアに参加することができたので、今回は最後でしたが今まで一番大型紙芝居もうまくできたし、自分に自信をもって取り組むことができたと思います。先生と一緒に参加したボランティアを通して本当にたくさんの関わりをもつことができ、自分にとって大きな経験や知識をもつことができました。ありがとうございました。

普段あまり関わる事のない乳児とふれあうことができた。

どんなおもちゃ・遊びなどが好きで、どれくらい集中できるのかなどを知れたこと。

保護者の方の子どもとの関わりが見られたこと。

音楽や音があるのは良かったと思う。

周りの学生の対応などをみて、勉強になりました。

親と子どもの関係を見ることができた。

なかなか関わることができない0歳児とふれあうことができた。

実際に子どもたちと関わることで、年齢に合った関わりが分かってくる。

保護者の方とも関われるので、遊びながらその子のことが分かってきた。声かけが困っても、学生や先生や保護者の方のを真似して良いところを盗むことができた。

実際に子どもと関わり、反応を見ることができたこと。

保護者の方と少し会話ができたこと。

乳児と楽しくふれあうことができた。

なかなか話せない乳児の親と話ができた。

学生同士が連携してできた。

保護者の方とお話できて良かった。

異年齢の子ども同士関わることができた。

一人ひとり役割を分担して、子どもや保護者に見てもらえる機会があって良かった。

今日は年齢の幅が広くて、様々な関わりをすることができました。

とても楽しかった。

おもちゃも楽しそうにしていた

乳児の子を抱っこしていて、周りの人との関わりを見ることができて良かったです。

おもちゃがたくさんあって良かった。

初めて参加させてもらって、とても楽しかった。

児童文化サークルの活動が見られた。

秋祭りの様子が見られた。

子どもたちが楽しみながら遊んでいるところを見て、イベントや遊びのアイデアでこんな風にしたら楽しみながら出来るのだと学べた。

子どもと一緒に遊べて楽しかった。

初めて子どもの前で手遊びを行って、声かけの難しさを知ることができた。

親子とのふれあいができた。

特に0～5歳のお母さんたちの話が聞けたこと。

子どもと一緒に手遊びをしたり、親子で遊ぶことができたことが良かった。

子どもたちとふれあうことができた。

児童文化サークルの出し物を見て、実習での出し物の参考になった。

保護者の方が気さくに話しかけてくださって、楽しい雰囲気でも過ごせた。

異年齢の子どもと関わりがもてた。

手作りおもちゃ（魚釣り）のアイデアを参考にできた。

お菓子を釣るという発想がおもしろかった。

今日は私たち学生が主体となっていた活動ではなかったですけど、新しいアイデアを見ることができすごく参考になって良かったです。

親子で家にはないおもちゃを使ったり、楽しそうに遊んでいた所を見たり、読み聞かせで家ではあまりできない紙芝居などを使ったこと。

今回初のペープサートを取り入れてみた。

歌を歌うだけよりもペープサートがある方が、やはり子どもの興味を引きつけやすいことを改めて感じた。

急遽、(ハロウィン)シアターをするという変更があったが、いつもとは違った楽しみ方ができて良かった。(少々子どもより親よりだったが…)

ダンスをしたり、マジックがみられて楽しかった。

ハロウィンのものを身に付けて、雰囲気味わえて良かった。

子どもたちの前で話をしたり、遊んだりするというを実際に体験できて、良い経験になり、自信へとつながられた。

子どもとふれあうことが今まで多かったが、今回は親御さんとお子さんのことや保育園について話のできたので良かった。

パネルシアターを今までやって来なかったので、それにチャレンジしたことは良かったと思う。また、支援センターの方々とコラボすることで、今まで自分たちがやって来たことをプロの方に見てもらい良い機会となり、プロの方の内容も見ることができ、良い勉強になり、参考にしていきたいと思いました。

一年を通じてたくさん参加してくれる子どもの成長が見られた。

「森のクリスマス」のパネルシアターを初めて知ったが、練習することで働き出してからも使えそうだった。

支援センターの人の関わりや、出しものを見ることができたので、声かけの仕方など学ぶことができた。

実際に子どもと関わることで、自信となり、成功した点も失敗した点も知識となり、有意義な時間を過ごすことができた。

初めて「製作」をプログラムに入れてどうなるかと思ったが、親子で仲良くペンを使用したり、シール貼りを楽しんだりされている姿をみて嬉しかった。

貴重な体験となった。

「反省と課題について」

緊張が倍になってしまい、ペープサートをするとき、早口になってしまったり、ペープサートの説明ができなかったりしてそこが、反省点だなと思いました。

F先生がフォローしてくれてとても助かりました。もっとペープサートをするときの注意点を考えないといけないと思いました。

また、子どもたちと遊ぶとき、どのように関わればいいのか分かりませんでした。幼稚園の子どもたちがいなくなると大人の数の方が増えるため、保護者の方と子どもたちとどのように関わるべきか分からず、見守るしかなかったです。

初めての参加で戸惑いがありました。

先生に指示されないと次の絵本やペープサートに動けなかったこと。

1回でもいいからその日行うことを通し練習してみる。

ピアノの音量は適当であったかよく分からない。

伴奏は失敗してしまった比較的小さな子どもたちだったので、きちんと伝わったのかは不安です。

ピアノ、特にしりとり歌が練習不足でした。

パネルシアターは練習していなかったので、よく分からなかった。練習はしっかりするべきと自分で思った。

練習不足が目立ってしまった。早めに集まる意味がなかった。

子どもの対応が少し難しかった。

年齢が小さすぎて話をあまり聞いてくれなかったかなって思いました。ちょっと話が長すぎたと思いました。

暗幕の後ろに来る子どもへの対応を工夫するべきだと感じました。

事前の打ち合わせに参加できていなかったのが、良い活動にする為にも次回からできるだけ参加していきたいと思いました。

今回特別に何かをしたわけではありませんでしたが、何か前で活動をする場合は本番にきちんとできるよう練習や準備をしっかりしていこうと思いました。

もっと歌うなら元気よく歌った方が良かった。曲が分からず歌えなかった。歌える人がもっと元気よく歌えば分からない人も巻き込めるし、子どもたちもやりやすかったと思う。

急に来ることになった自分はどうしたら良いか分からなかったから、もっと先導してほしかった部分がある。

全員の予定が合わず、打ち合わせが前日になり、歌を歌うところや、学生の出しものをするときにしっかりしていれば、もっと盛り上げることができた。

何か全員でできる簡単な遊びができたなら良かったと思う。

子どもたちも始めは警戒して遊ぶことができなかった。

もう少し大きな声で歌ったり、読み聞かせたりなどができたら良いかと思った。

1人の子ばかり見ていたので、全体を見ながら活動できたら良かった。

ピアノがすごく失敗してしまって、すみませんでした。緊張と練習不足でした。

わらべうたは進行の仕方が難しくて戸惑ってしまった。わらべうたのやり方をもっと勉強したい。

パネルシアターやペープサートなどをしているときに、どこまで注意していいか分からずなかなか先に進むことができなかった。

子どもと遊んでみて、最初は緊張したりして、反応がなかったりしていた。

動き回る子どもにどうやって静かに絵本などを見せるか、そういったことが課題だと感じました。

たくさんの方に興味がある子もいるので、遊びのバリエーションを増やしていければ良いと思った。

早い段階から子どもとふれあっていることで、より子どもとの距離が近くなるので、もう少し早い段階からふれあっていたら良かったと思いました。

今回、全体的に子どもの年齢が低かったので、うまく関わるのができるか心配でした。

今回の活動場所が広かったため、動くのが好きな子どもにとっては走り回れるよい場所だなと思いました。

わらべうたから歌へのつなぎの部分が、もう少しスムーズに行えば良かったと思う。

パネルシアターは、子どもの年齢が低いこともあったので、もっと注意を引くことができるよう工夫すると良かったかなと思った。

何か活動をしているときに、子どもがお母さんから離れてどこかへ行ってしまうたりすることがあったので、活動している人以外で子どもたちを見守ってあげることが大切だと思った。

歌の伴奏をした。あまり練習できていなかったのととても失敗してしまいました。

人前でピアノ伴奏がもっと上手にできるようにしたい。

手遊びふれあい遊びをもっと勉強する。

自己紹介のとき1人が終わった後、次に行く間にためがあったこと。→和音を2回くらい入れて、次の歌の準備ができるようにする。

活動の間がスムーズに行かなかったこと。→しっかり打ち合わせや練習をする。

おむつ交換をする場所がなかったこと。

マットの面積が狭かったこと。

せっかくの機会に保護者の方と十分、お話をすることができなかったこと。

実習では5歳児しか担当したことなかったので、乳児の子どもばかりで対応の仕方がわからなかった。

言葉でコミュニケーションが全部とれるわけではなく、表情などから楽しんでいるのかなどを読み取って子どもたちと関わることにもっと慣れて行きたいと思った。

子どもたちや保護者のこと。

もっとたくさん関わるが必要だと思いました。

子どもとは、子どもが興味をもてるようなおもちゃを使い、コミュニケーションがとれるようにする。

場所の広さを把握していなかったため、環境設定ができなかった。また、どのくらいの発達段階の子どもがいるか推測が甘かったため発達段階に合った遊びを提供できなかった。

どこに何があるかもしっかり把握していれば、もっと良くできたと思う。

ベビーカーでこられる方が多くて、荷物やベビーカーを置くところがあるとよいと思った。その位置を全員が把握しておき、案内しやすいようにする。

マットを全体的に広く使い、子どもも保護者も学生も、靴をぬいで遊ぶようにすることで、それぞれの距離が縮まると思った。

活動のつながぎをどうするか、無駄な時間がないようにする。

全体の中で盛り上がる場所などもあると良いと思った。

自己紹介のピアノ伴奏と歌い出しのタイミングをもう少し練習する必要。

だいたいの子どもの様子が分かったので、内容を次に生かせると思う。

手遊びの歌ややり方を学生同士で確認しておく必要

メリハリ

マットの上だけでは物足りない子がたくさんいて、転ぶ子が多かった。

マットのしたに絨毯を敷いて足が触れたときのさわり心地を楽しむこともできたのかなと思う。

もう少し広いところでできたら良かった。

歌を今回取り入れてみたけれど、進め方や終わり方をもう少し考えた方が良かったと思った。

ピアノ頑張ります。

「あなたのおなまえは」の入りがやっぱり難しいと思った。

子どもたちが今日は大勢いて、ぶつかったりしていたので、大学生も大勢いたので、気をつけて配慮ができれば良かった。

空調の管理が難しかった。

おさるのジョージのように人形などを通して最初の壁を破れば、かなり距離をつめられて良かった。

今回は自分の作ったエプロンシアターをさせてもらった。バナナとか出す前にもっと広げてもよかったと思う。

歌を歌うとき、前にだれか立つ。ペープサートとかあったら注目して歌えそう。

もう少し身体を動かして遊べるものがあったらよかったと思う。

絵本が置いてある机がもう少し低いとよかったと思う。

周りの学生がもっと声かけやアドリブを加えた方が良かったと思う。

子どもとなじむまで時間がかかった。

わらべうたと手遊びが思っていたより短かかったので、もう少し子どもとのやりとりを入れても良かった。

紙芝居を読んでいる最中に舞台を閉じようとしている子への対応がうまくできなかった。

紙芝居を読むとき子どもが前に出てきて紙芝居舞台の扉を閉じようとしたので困りましたが、声かけが不十分でした。また、紙芝居を読みながら口や目を指しながらするときに、見えていなかったり見えていたりしていたので、しっかり見えるように心がけたい。

絵本がせっかくあったので、もっと手の届く場所にあれば良かった。

もっとたくさん子どもと関わることができると良かった。

名札を持って行けたら良かった。

次は児童文化サークルのように自分たちも出し物ができると良い。

たくさん子どもと保護者の方と話して、コミュニケーションを取り、自分のことに吸収することができれば良かった。

年齢別で集中力の差などがあるから絵本や紙芝居の長さやタイミングが難しいと思った。

ちゃんと絵本が借りられることを確認してから、プログラムを立てなければならなかった。

次にシアターをするときは、子どもに内容が分かりやすいものが見つけられればいいかなと思う。

最後のしめは、紙芝居より絵本の方がいいかもしれないと思った。

他の学生がいるからと安心してしまっていたので、子どもたちを全体的に見るという視野が狭くなっていた。自分が担当したハロウィンシアターでは、最後まで集中できるように見せることができなかつたので、言葉やリアクションに変化を付けて、もっとオーバーにした方が楽しめたかもしれない。

今回は以上のことを改善できるように、緊張感をもって子どもと向き合い、子どもが楽しむことができるよう言葉かけや表現法を追求していきたいと思う。

子どもとふれあうことが今まで多かったが、今回は親御さんとお子さんのことや保育園について話のできたので良かった。

人数が少ないので足りない部分を補うようにはできたが、準備がしっかりしていなかつたので、段取りはきちんとすべきだと思った。

練習をどれだけしていても本番となるとやっぱりうまくいかないで、もっともっと練習して完璧になるまですべきだと思った。ところどころ歌詞を忘れてしまいせっかくの楽しい歌が小さな声になり、盛り上がりになつたと思うので、まとめると練習不足を感じました。

寸劇を取り入れたのはアイデアとしては良かったと思うが、みんなで歌うというより見てもらうになつたので、先に「これから歌を歌うよ！」と前置きをするか、もしくは1回歌って「次はみんなで歌おう！」という声かけができたなら良かったな、と思った。

サンタの帽子を忘れた。・・・準備物の確認

ピアノの音が小さかった。

全体的に声が小さかった。

学生の荷物をまとめて、保護者の方に広く使ってもらえるようにする。

今回の反省点は、視野が狭く、全体的に子どもを見るができなかつた。自分をもっと活発に移動し、子どもの様子確かめ、一瞬一瞬の出来事を見逃さずに、反応していきたいと思った。

これからの課題は子どもの親の前で子どもと関わることに少し苦手意識があるので、親子のふれあいを大切にしつつ、自分はどこまで関わるべきかを見極め、自信をもった保育をしていきたい。

1歳男児と3歳男児が少しもめてしまってなんとかしようとしたが、母親の方が助けて下さつたので事は大きくならなかつた。

1人でなんとかしようせず周りの力を借りることも大切だと思った。

ふれあい遊びについていえば、参加して下さる保護者さんは、出前講座のねらい（目的）の他に、子どもにとって家ではなかなかできない遊びや学生という新しい出会いや関わりを求めているのではないかなと思うことがあります。なので毎回違う絵本や紙芝居を読むことや「はらぺこあおむし」のような歌いながら読める絵本の紹介、ときには製作や簡単な運動などを取り入れることで子どもにとっても保護者さんにとっても新たな発見になるのではないかと思います。そして何より学生自身が楽しむこと、みんなで楽しい雰囲気を作っていくことが大切だと思います。